

アジア・ゲートウェイ構想について 留学生問題を中心として

広島大学副学長(国際担当)
二宮 皓(あきら)

< 検討の方向についての意見 >

世界といっても、ターゲット国を戦略的に絞り、それぞれの国別のスキームを開発することはどうか

世界最高水準の大学づくりにおいては、国際的展開をする重点大学を限定する必要がある(国際的大学と国内的大学に区別する)(アメリカでも4,000もの大学があるが、留学生等を積極的に受入れる国際的競争力のある大学は100大学程度だといわれている)。

「頭脳を惹きつける」政策と「多くの留学生(学習者)を惹きつける」政策とは意味が異なる(後者は観光産業に匹敵するほどの外貨獲得・大学の収入増を意味するサービスの国際貿易の問題である(オーストラリアの戦略)。前者は「ブレイン・ゲイン」(頭脳獲得)の問題である。両者をバランスさせることも重要かも知れない(イギリス)。)

アジアへのドアの開き方が問題ではないのか。日本の留学生の多くが中国、韓国、台湾、他のアジア諸国からであり、かつては欧米からの留学生が少ないことを問題視していたのではないのか。アジアからの留学生はすでに多くいることになり、アジアから十分に惹きつけているのではないのか。優秀な人材が日本留学を選んでいるかどうかは別にして。イギリスのレスター大学ではその多くが欧米(旧東欧も含む)やアフリカの学生で、アジアは少ない。そこでイギリスでは今後の留学生市場を見越して、アジア(インドや中国)をターゲットとする留学生リクルート戦略を推進しているともいえる。しかも彼らはイギリスの大学の高額な授業料を容易に負担している層である。日本もアジアのこうした国々の富裕層の子弟を呼び込むつもりであるのか。それならば、日本の大学の本当のブランド力が問われることになる。

新たな国際的大学改革についての提案(検討課題として追加すべき事項)

1) 国際的展開をする重点大学を、Year-round University、年4学期制(年4回入学)を導入し、アジアの大学と欧米の大学とをスムーズに接続できるような「リボルビングドア」型大学に改革してはどうか。

2) 国際的展開をする重点大学は、それぞれの専攻で英語による国際標準化された修士コース(日本の基準ではなく、諸外国のニーズに応える、イギリスやオーストラリアと競争できる、規制を緩和した欧米型修士プログラム)開設するものとする。

3) 海外で日本語を学ぶ中等学校や大学のアジア・ゲートウェイ(日本の学校・大学との姉妹縁組・交流支援)を新設する(日本語によるインターネット基盤を整備し、インターネットを活用した

学校支援を行う)。

4) 国際的展開をする重点大学については、外国人教員を積極的に雇用する(10%~20%)ための奨励施策を講じる(半ば強制的に外国人教員の比率を高めさせる)。(職員も同様である)。大学院課程の担当とする。

(2) 留学生施策の戦略的方策について

1) 21の提言をはじめとした先生のご意見

British Councilなどのような留学生交流機関の必要性
大学の国際標準化(グローバルスタンダード化)(日本の大学の克服)
国費留学生のブランド化戦略
留学生等の宿舍整備(民間宿舍の借り上げ事業)
留学生の日本への就職機会の開放・拡大政策
21世紀型留学生は「短期留学型」が中心(EUなど)
ODA+戦略による留学生の国際市場への参入とシェアの拡大(コストを負担する留学生)

2) ポスト「10万人計画」の必要性と今後盛り込むべき内容

留学生の国際市場の規模の拡大(200万人から500万人へ)に応じた日本のシェア

- 1) イギリスは25万人から80万人に増やす計画(2006年 2015年)
- 2) 日本のシェアを10%から15%程度まで高める
 - 10万人計画のときの市場規模は100万人から150万人(10%)
 - 200万人の15%として 30万人。10%としても 20万人
 - 500万人の市場の10%でも50万人
 - 長期留学の多くは、中国、インド、アフリカ諸国の留学生の増大による
 - 短期交換型留学は、それぞれ高等教育人口の10%から15%(EUやOECD加盟国など)。

量的拡充方策

- ・ 優秀な人材の獲得競争(国家的事業)
- ・ 中国・インドなど特定国留学生リクルート戦略
- ・

質の確保と優秀な留学生の確保

- ・ 「特定分野博士課程後期特別奨学金」(国際競争力強化事業)の特設
- ・ 「ジョイント修士」「ダブル修士」の積極的な開発支援(短期学生交流推進事業の拡大)
- ・ 各国の優れた世界的大学(世界トップ200大学)との協定による学部学生の「編入学」促進計画(国費留学生制度(大学推薦)のツィニング型化)
- ・ 「グローバル・イングリッシュ」人口への対応と受け入れプログラム(英語コースの拡充)

「アジア圏ジョイント学位(修士)推進計画(英語によるコース)」の新設

・ 日本の大学を基幹大学とし、アジア(インド、中国など)の大学を連携大学とし、共同でカリキュラムやコースを開発し、連携大学から学生を募集すると同時に、共同で学生を世界から募集(日本の基幹大学のコース学生として登録)し、国際性の高い修士学位を提供する。インドや中国の大学の学生はダブル学位を取得することもできる。

アジア等に進出している日本企業・国際的企業、JICAなどの行政法人・団体、JETROあるいは海外のNPOなどにおける日本人学生のためのインターシップ事業の開発。

(3) 留学生の国際市場動向分析とWTO高等教育サービス貿易自由化の影響のポイント

途上国におけるオーストラリア、イギリス等の大学の進出(ブランド品化)(オフショア学生として留学生統計に算入)

- ・ シンガポール、マレーシア、オマーン、カタールなど多くに国で展開
- ・ ノルウェー、デンマークなどの国でもオーストラリアのオフショアプログラムが提供される
- ・ 中国の大学は積極的に海外の大学と提携したプログラムを提供(豪州・中国共同)
- ・ 企業によるE-learningなどが急激に増加している。

日本の問題点と課題

- ・ 日本の大学人はあまり深刻に考えていないのが現状(知られていない)
- ・ 日本の大学は受身であって、積極的に国際市場に出かけていくという意欲・意志がない
- ・ 国際的雇用能力を高めるプログラムを提供できない?
- ・ 海外の良質のサービスを日本人が享受できる環境を整備するのかどうか
- ・ 海外への日本の高等教育サービスの提供を活性化させるのかどうか
- ・ アジアの高等教育市場への参入についての戦略も見通しもない
- ・ 日本の高等教育サービスを購入したい人々へ積極的にアプローチし、購入しやすくするためのインフラの整備が考えられていない
- ・ 海外の大学とのジョイントベンチャー型高等教育サービス提供(海外でも国内でも)の可能性を探る努力もなされていない
- ・ 国立大学への依存が高すぎることによる国際市場への参入が遅れているのかもしれない(規制を緩めることで国際展開を自由にもすることも可能)

(4) その他アジア・ゲートウェイ構想の全般に対する意見

「国際的に活躍できる日本人の育成」という重大な課題について、「外国人留学生が国際的に活躍できる人材として育成されているかどうか」という視点でまず分析する必要がある。優れた外国人でさえも、日本の高等教育機関で訓練を受けている限り「国際的に活躍できる人材」として育つことができていないのかどうか。もしそうであれば、日本人を国際的に活躍できる人材に育成する力は日本の大学等にならないことになる。そうした意味では「国際的に活躍できる人材」の分析がほとんど行われていないといえる。

日本文化と触れることで新たな知や技、あるいは心が誕生するような本格的修行・勉強ができるような本物の教育機会を提供するようなアジア・ゲートウェイであって欲しい。それこそ日本留学の魅力となる。この図式はすべての文化圏・国に適用できる考え方であり、それぞれがアイデンティティと誇りをもって存在できる、共に生きる(Living Together)思想である。文化接触が新たな地平を切り開くような日本の開き方であって欲しい。